

2019年11月24日 『目覚めた意識を持つて』青戸教会礼拝説教 高橋克樹牧師

聖書 エレミヤ書23章1～6節、ヨハネ黙示録1章4～8節

預言者エレミヤが召命を受けたのは前627年です。この年は、オリエント世界の覇者であるアッシリア帝国のアッシュルバナパル王（前668～627年）が死んだ年でもあり、これ以後アッシリア帝国は急速に国力が衰えてきます。このアッシリア帝国に代わって台頭してきたのは新バビロン帝国でした。また、キアクサレス王（前625～585年）が王位についたメディア帝国も覇権を争う大国になります。そして長い間アッシリア帝国によって抑圧されていた国々が独立を求めて立ち上がってくるのです。なかでも、この新バビロニアとメディア帝国の王は力を合わせてアッシリア帝国の首都ニネベを占領し（前612年）、その残党たちも前605年には完全に滅ぼしてしまいます。エレミヤが神の召しを受けたとき、彼はまだ十代半ばの若者でした（1章6節）。しかも時代は大きな変革期にあつたので、激動する時代を的確に予測することが難しいときでした。経験の浅いエレミヤが逡巡するのは当たり前です。そこで神は彼にアーモンド（シヤーケード）の枝を見せ、八方ふさがりの出口のない閉塞状況の中で、あなただけは「目覚めた」（シヨーケード）意識を持って時代をしっかりと見定めなさいと促します。

聖書の神は歴史を導く神です。預言者は時代の激動期の中で、神が歴史をどの方向に導いているのか。また、何が被造世界にとって真実であるのかを、目の前で展開している現実の歴史から分析しなければなりません。人々に語り告げるためには、まず預言者自身が目覚めていて、時代を見張っていないなければならないのです。このような激動の時代を過ごしたエレミヤは、神の言葉を口に授けられたがゆえに（1章9節）、目覚めた者として語りたくないことも敢えて語る預言活動に入っていくのです。これ以後、エレミヤはバビロン捕囚までの激動の40年間を、神の意志と自分の思いとの間で激しく葛藤しながら、神の言葉を語りつづける人生を歩みます。

彼の預言者としての背景を知るためには、エレミヤの成育歴と、彼を取り巻く時代状況を見ることが重要です。彼はベニヤミン族の領土にあるアナトトという村の古い祭司の家に生まれました。彼はユダ王国の都エルサレムの北東4キロの近さにあつたアナトトの祭司の一族の一員なのです。エルサレムがイスラエルの聖所となる前はシロが中央聖所でした。その祭司の流れをくむ

のがアナトトの祭司です。彼らはエルサレム神殿が異教の神殿と同じような壮大な姿で建設されたことに批判的でした。シロの聖所はもともと移動可能な幕屋だったので、エルサレム神殿は神ヤハウェを神殿内に閉じ込めるものと映ったはずです。その批判精神がエレミヤには継承されていました。また、時代状況を見てみると、前721年に北のイスラエル王国がアッシリア帝国の拡張政策の対象となって滅ばされたとき、南のユダ王国は降伏して巨額な貢を納めて属国になって生き延びました（列王記下18章14～16節）。辛うじて延命したユダ王国のヒゼキヤ王（在位前725～697年）ですが、晩年にはアッシリアへの反乱を試みますが、失敗して失脚します。そのため彼が死んだあと、それに代わってユダ王国の王になったマナセ王（在位前697～642年）は、アッシリア帝国の神々に対して絶対的な忠誠の誓いを立て、アッシリアの神々を積極的にエルサレム神殿に受け入れてしまったのです。そのためにマナセは罪なき者の血を流し、エルサレムの祭儀をはなだしく異教化させて神殿の中に異教の祭壇まで築いたのです。ユダ王国を滅亡させた最大の原因は、マナセ王の背信のゆえだと指摘されるほどです（列王記下21章2～18節）。エレミヤが召命を受けた時代のエルサレムは、異教の神々が林立する聖所になっていたのです。

その責任の多くはユダ王国の王をはじめとした指導者たちにあります。本日のテキストである23章1～6節は、21章から始まる「王に対する預言」の一部で、この異教化したユダ王国の政治状況の中で、それを黙認するだけでなく積極的に受容していった王たちに対する審判の言葉が集められています。特に21章はユダ王国の最後の王であるゼデキヤ王（前597～587年）に対して語られた預言です。ときはユダ王国が滅んでエルサレム神殿が破壊される前年の前588年初頭です。エルサレムはバビロン軍のネブカドレツアル王によって包囲されていて、エルサレムは陥落の危機的状況の中にありました。ネブカドレツアル王はエルサレムを陥落させるべく最後の攻撃を仕掛けようとしているわけですから、ゼデキヤ王は大変な不安感の中で、神がエルサレムを救われるかどうかをエレミヤに何度も人を差し向けて聞いています。その答えが21章4～6節の預言です。読んでみましょう。『4イスラエルの神、主はこう言われる。見よ、お前たちを包囲しているバビロンの王やカルデア人と、お前たちは武器を手にして戦ってきたが、わたしはその矛先を城壁の外から転じさせ、この都（エルサレム）の真ん中に集める。5わたし

は手を伸ばし、力ある腕をもってお前たちに敵対し、怒り、憤り、激怒して戦う。6そして、この都に住む者を、人も獣も撃つ』。エルサレムが陥落する危機の中で神ヤハウエはご自分の民を守るために外敵と戦ってきたが、今度はその矛先をエルサレムの内部に向けるというのです。ゼデキヤ王たち指導層に敵対し、怒り、憤り、激怒して戦うというのです。神ヤハウエがエルサレムに住むご自分の民を撃つというのです。これは神の怒りがご自分の民に向けられるという驚くべき言葉です。続く7節も読んでみましょう。『7わたしはユダの王ゼデキヤとその家臣、その民のうち、疫病、戦争、飢饉を生き延びてこの都に残った者を、バビロンの王ネブカドレツアルの手、敵の手、命を奪おうとする者の手に渡す。バビロンの王は彼らを剣をもって撃つ。ためらわず、惜しまず、憐れまない』。これは、生き残った者たちもバビロンの王の手に渡されるという厳しい審判の言葉です。エレミヤが語る内容は、神御自身がイスラエルの民の存在をことごとく否定するというものでした。ダビデ王朝が絶滅し、イスラエルの民も絶滅すると言っているのです。

ユダ王国では、都エルサレムは神の守りの中にあるという神話に近い絶対的な確信を誰もが抱いていましたが、それとは真逆なことがここで預言されているのです。エレミヤの預言はユダ王国を徹底的に否定します。神は、都エルサレムとユダ王国を滅ぼして敵に渡すというのですから、ここで人間存在を否定しているのは預言者エレミヤ自身と神です。ですから、21章8節以下によると、バビロンに降伏すれば「命の道」に至るけれども、バビロンと戦い続けるならば「死の道」に至る、と神の意志を語っているのです。

そもそもゼデキヤ王は、その前のヨヤキム王（前608〜598年）がエジプトの王ネコによって王位につけられたのとは違って、第1回捕囚後にバビロンのネブカドレツアル王によって王になった傀儡的な王です。このようにゼデキヤ王はバビロンのネブカドレツアル王の主権の下に置かれていたのですが、エルサレムの宮廷にはいまだにヨヤキム王時代の親エジプト派とも言うべきグループが強い力を持っていました。その影響もあって、ゼデキヤ王はバビロンに隷属するか、エジプトに助けを求めるかで迷ってしまい優柔不断になっていたのです。

しかし、大国のバビロンがそのような態度を許すわけがありません。結局、ゼデキヤ王はバビロンに反旗を翻したために、自分の目の前で子どもたちを殺され、その上でゼデキヤ王の目はつぶされ、青銅の足かせをはめられ、2000キロ離れたバビロンに連行されて、死ぬまで牢獄に

閉じ込められたのです。

エレミヤは終始一貫してユダ王国の滅亡を預言しました。それは神の審判です。けれども、その審判は神の救済史においては、最終的なものではなかったのです。神の民を顧みることがなかった王はじめ指導者たちに対して、神は責任を取らせません。ただ、神の民を見捨てたわけではないのです。本日のテキストである23章2節では『あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった』と、指導者たちの無責任さを指摘します。ここでの「散らす」(ブーツ)とは、ユダ王国の指導層が当然養うべき民(「わたしの羊の群れ」)をきちんとケアしなかった(「顧みることをしなかった」)という意味です。

神は羊を滅ぼした羊飼いに對しては裁きを下されるが、羊の命には目を向けて配慮をすると言います。そして、捕囚民をユダ王国に帰還させるという約束を語ります。3節で『このわたしが、群れの残った羊(残りの者)を、追いやった(追い散らした)。あらゆる国々(地)から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす』の「追いやる」(ナードハ)は、捕囚によって民を離散させるという意味です。捕囚は王たちが民を守らなかったことで引き起こされてしまったけれども、今度は神自らが牧者として、散らされた民を集め、元の牧場に帰らせ、新しいメシアを立てるという預言です。そのことが5節で『わたしはダビデのために正しい若枝(ツエマハ)を起こす』と表現しているのです。「若枝」(ツエマハ)とは将来現れるべき救済者としてのメシアのことです。この「若枝」は、イザヤ11章1節で『エッサイの株から一つの芽(ホーテル)が萌えいで、その根からひとつの若枝(ネーツェル)が育ち』と語られているネーツェルと同じ意味です。

ここでの「エッサイ」とはダビデの父の名前で、ダビデという根株から(「血筋から」)生まれ出てきた新しい芽(「若枝」)が救い主(メシア)になるということを語ったものです。

ここで皆さんは、エレミヤはダビデ王朝の終焉を預言したのに、ダビデ王朝の血筋から新たなメシアが生まれるということを語るのは矛盾していると思われたのではないのでしょうか。私たちはイエス・キリストの系図のこともあって、イエスがダビデの血筋から生まれたということを信じています。しかし、そこには断絶があるのです。エレミヤはそれがバビロン捕囚の出来事だということです。滅亡寸前のユダ王国においては、国民の間に貧富の差が拡大していて、数々の不正

や不義が蔓延していました。神への真実な姿勢を貫く生き方をする人はごく少数でした。神への背信が広くはびこっていた時代だったのです。そのような不正と背信の道を歩むダビデ王朝を神は滅ぼされるというのがエレミヤの預言の内容でした。神はイスラエルにおける人間的な不正と不義の連続性をいったん断ち切ったのです。すなわち、エッサイの根株から成長したダビデ王朝という大きな木が伐り倒されて、切り株だけが残される事態が生じるのです。最初の大きな木は、神の意志に背信するものとなったので、神によって切り倒されました。ところが5〜6節によると、一度切り倒されたダビデの木の切り株から一つの若枝が生じる。その若枝がメシアとなって神の意志を行うことになるのです。そのメシアの名前は「主は我らの救い」と呼ばれるのです。

私たちは日常生活において、毎日いくつもの否定に出会います。社会で弱い者の存在が脅かされる姿にも接します。自分自身の弱さや限界にも直面します。そのために自分は神に見捨てられたのではないかと思うことが度々起こります。だから、この世的に強いものに頼ろうとしてしまうのです。ただこの世で強いものはたいいてい人間存在を否定する力の上に成立しています。エレミヤの預言によって糾弾されたユダ王国の指導者たちをはじめとして、一般の人々も強国バビロンや大國エジプトに頼ろうとしますが、結局はその否定的な破壊力によって滅ぼされたことでも、そのことは分かります。

来週からアドヴェントに入りますが、この中でクリスマスに受洗された方は多いと思います。洗礼とは、それまでの生き方がいったん断ち切られて、それまでとは違う生き方へと踏み出す出来事の転換点に起きた救いの出来事です。つまり、それまで形成してきた「自分」という存在を象徴する最初の大きな木を自ら打ち倒して、残された切り株から萌え出てきた若枝としての自分を新たに形づくっていくのと似ています。しかもそれは神とともに自分を形成していく歩みの中で行われることです。神は御自分が創造された者たちが、御心に背く生き方をするとき、決して見過ごされません。そこには審判がある。けれども、神は一度創造された者に最後まで責任的にかかわって、自らの愛を貫き通そうとされるのです。その象徴が切り株に芽生えた若枝としての私たちであり、救済史においてはメシアたるイエス・キリストのことなのです。

神は人間存在を否定するこの世の諸力を凌駕して、新しい命に生きる者を生みだすのです。そのためには、私たちは一旦、古い自分に死ななければならぬ。神の審判は確かに古い自分とい

う存在を打ち倒します。けれども、そこには神の愛と慈しみがあるのです。